

New Perspectives To The Next Culture

FUSE MAGAZINE



005

DRAWING SOUNDS

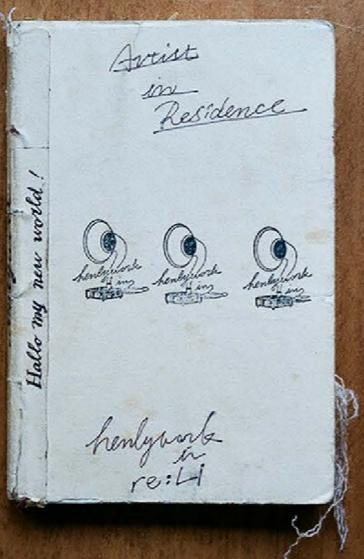
henlywork

本記事は、音声と文章を同時に楽しんでいた
べくよう設計しております。

■のマークの箇所には楽曲再生ページへのリ
ンクが埋め込まれていますので、ブラウザの
「新規タブ」でページを開き、楽曲を再生しな
がらインタビュー記事をお楽しみください。



音楽とイラスト。
ふたつの領域を行き来しながら活動をする
henlywork(ヘンリーワーク)。「EATBEAT」(イー
トビートー)では、調理の音をサンプリングしなが
ら、その音をリアルタイムに楽曲へと仕立てあげ、
「CHALKBOY」(チョークボーイ)では、手描きのド
ローイングでさまざまな場所にシンボリックなイラ
ストを生み出している。このふたつは一見、相互に
関連性のない行為に見えるが、意外な点でリンク
していた。その共通点は、彼が常に持ち歩いている
手作りのノートにあった。



思考をスケッチする

FUSE: henlyworkとしては音楽、CHALKBOYとしてはチョークやペインティング、そしてEATBEATの活動のそれぞれの関係性は？

henly: 音楽と描くことのふたつで言えばリンクしているところがあつて。曲を作るときにノートを使うんですね。ノートで何をするかと言うと、作りたい曲のアイデアを音符として記すのではなく、僕にしか分からないようなイラストを描いてます。チャートとか、波形とか、色々あつて、それがそのまま楽譜になるんです。

FUSE: なぜ、音符ではなく、イラストに？

henly: まず頭の中できつちりと形になるまで曲を想像するんです。ただ、そのまま作ろうと楽器に向かうと、「音色はどうしよう」とか別のことに頭を使って想像していた音が再生ストップされちゃうんですよね。そうすると、現実的な問題にぶつかって最初に思い浮かんでいたゾクゾクするようなアイデアが急にしぼんでくるんです。それがすごくイヤで頭の中に鳴った音がそのまま残るようスケッチするんです。

FUSE: スケッチする方法は、オリジナルのやり方？

henly: そうです。紙にアウトプットするのが最初は難しかったのですが、正解も間違いもそこには無くて。ただこれしか方法がなかったから、ずっとやってたんです。それがトレーニングになって会話の途中に浮かんでくるようなアイデアもアウトプットできるようになりました。頭に浮かんだアイデアを瞬間的に捉えていいなと思ったものをそのままの状態で書き込むっていう行程が自分の得意とするところみたいで。

FUSE: スケッチしたものは、最終的に具体的なイラストになる？

henly: 過去のノートを持ってきたのでこれを見ながら音楽を聞いてみましょうか。



スケッチから生まれる音楽

▼ *for the dance*

名古屋のカフェに5日間、アーティスト・イン・レジデンスのような形で滞在しながら楽曲を制作してみたんです。そのときのノートです。

FUSE: このノートはどのような仕組みですか(笑)

henly: 自分でも分からない(笑)これは、難しいんだけど……

FUSE: 後から見ても、自分の楽譜は読めますか。

henly: 全然分からないですね。自分にとってこの楽譜は、短期決戦なんです。そのときにしか分からないけど、そのときは楽譜よりもリアルに分かるんです。

▼ *for greens and flowers*

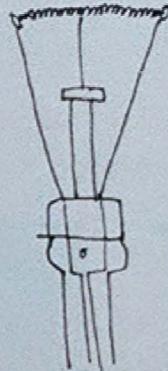
「FOOT STEPS」と書いてあるのは、たぶんこの曲かな。夜中一人で歩いてたから、床の足音が気になって書いたんだと思う。この曲は、発想のソースが足音で、あとはピアノを加えていこうっていうアイデアです。「WALTZ」って書いてるから、三拍子になってるのかな。一、二、三……アレ、ちゃうやん(笑)。四拍子だ。リズムは四拍子で、メロディーが三拍子のようになってるんですね。

一同:(笑)

FUSE: 音楽を作るときは、まず始めにノートにスケッチし始める?

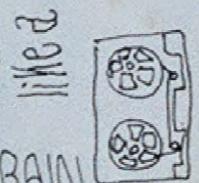
henly: いろいろな作り方があるのですが、例えば、カフェに着いて機材をセットアップした日の真夜中に、このときは適当にピアノを弾いていたんです。これからどういうふうにつけていこうかな、と。このとき、部屋には誰もいなくて、たまたま植物が置いてあったんです。誰も自分の演奏を聞いてないけど、植物には聞こえる。それなら、部屋の植物のために曲を作ろうと考え始めて。そうすると、適当に弾いていたなから素材が見えてきました。でも、その段階でいきなり曲を作り始めようとする、最初に思いついていたことって忘れるんです。だから、アイデアが頭のなかに浮かんだときにノートへと描き溜めてます。

FILAMENT



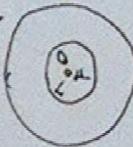
*a music
for filament*

SAMPLING FROM
RADIO



DIFFERENT TRAIN
CLASSICAL BALLET

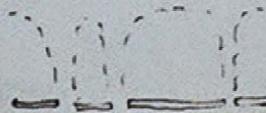
SILENT



SIDECHAIN COMPRESSION
VIA KICK NOISE

MEANS FILAMENTS

LFO



TAPE HISS → NOISE

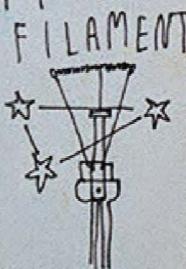
VINYL CLACK

ROHDES?

ELEMENTS ARE

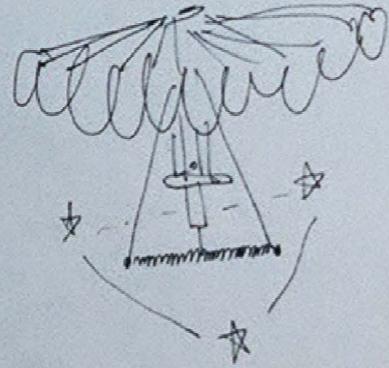
KICK * RADI-

O * BASS



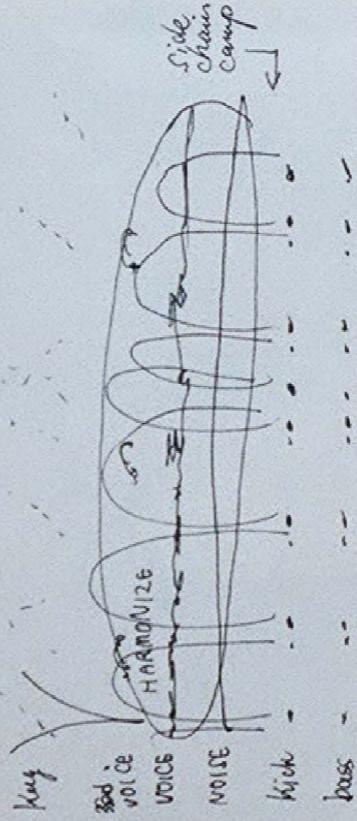
← MAKE A BEATS AND BASSLINE

Classical



TUTU

STRUCTURE OF
"FILAMENT"



▼ for girl's talk

この曲は、ビートの音色を描いていて、そこから曲作りを始めようとしていますね。このときによく聞いてたのが、Toroy moire、そういう参考にしたものも同時に書き込んでいます。「RETROSPECTIVE」と書いてありますね。たくさん喋るガールズトークのために作った曲で、ちょっとテンションがあがったらいいね、という思いで作ってました。

▼ for filament

これはめっちゃ覚えている。カフェの電球が、LEDではなくフィラメントの10Wくらいのもので使っていて。しかも、電圧の高い調理器具を使うと、電球たちが揺れるんですね。部屋の明かりがゆらゆらする光景が、すごく素敵だなと思って。ノートには、クルクルしたコイルの形のイメージを描いています。このイラストは、即興で弾いたピアノの音を細かくバラバラにしてそれをシンセサイザーに入れてから、また即興で演奏して作った音として表現されています。

FUSE:ノートのイラストが音楽へと変換されていくプロセスは、見ていてとても面白いですね。例えば、ある絵が描いてあってそこをクリックすると、音が流れるとか面白そうですね。頭の中のアイデアがどんなふう絵としてアウトプットされて音へと変化していくのかが可視化されるという。

▼ for sunlight in the morning

これは、金具が気になってるんですけどね。だから、金具の形を描いたり……。固いのに乗らかそうとか、そんなかんじだったかな。木と鉄のコントラストを下の階のカウンターでご飯を食べてるときに考えてましたね。この曲は長くて7分近くあるんです。

FUSE:曲そのものに加えて曲を形作った空間や体験が可視化されていたら面白いですね。ノートにイラストを描くきっかけとなったものに触れられると、曲を聞く体験がかなり拡張されますよね。いわゆる電子で作られている音のみを聞くだけではなくて、その音を形作る後ろ側にあるものが見えると、そこを見たい人にとってはいいかもしれないですね。音が生まれる原初の体験が見えたらいいな、と。



音楽とイラストを繋ぐ「即興性」

henly: ここまでは、音楽とイラストとのリンクの話だったのですが、今、CHALKBOYとしてのペインティングの活動とEATBEAT!としての活動もどこかでリンクするな、と思っていて。きっとそれは「ライブ性」というものを通してリンクするはずなんです。

ついこの間、ライブペインティング・ライブっていうのをやってみました。黒板にコンタクトマイクを仕込んで描いたときに出る音を拾ってみました。要は、黒板シンセみたいなものですね。もともと自分が作った曲があるのでそれを演奏しながら描くっていうのを実験的にやってみました。

結果的には、音楽とグラフィックっていうのはタイムラグがあるにせよ、同時に出来上がっていったんですね。ただ、課題は山積みで、お客さんを置いてけぼりにしてしまいました。この音は今どこからどうやって出ているのかとか、伝わってなかったんですね。だから途中で止めて説明しますって……。

FUSE: 実験を何にも説明せずに。

henly: そうそう。だから、黒板シンセを使いながら説明していったんですよ。そのときに、自分の発見があつて。ライブペインティングでマイクを仕込んで黒板に描いて、音量が変わるとメーターが振れて音階になって、曲のインストウルメンタルに乗る。そして、その音がまた頭のなかのアイデアに戻ってきて、描くことになる。説明してる間に、そういう循環にお客さんが結構感動してくれて。そこでお客さんと一体化できたというか、お客さんたちとひとつの場を作れたっていう認識があつて。

ここではCHALKBOYとしてやりましたが、例えばEATBEAT!ではグラフィカルに産地や調理の流れを説明しながら、描く音そのものが調理音と重なって音楽になつていくとか、芋を描いてるときに芋を引っこ抜いている音が流れてもいい。こうやって、ふたつを結びつけていくことができる方法が、先ほど話した「ライブペインティング・ライブ」のような即興的なライブ形式なのではないかと思っています。

特に、EATBEAT!は、料理から音楽が生まれていく過程は、家で成り立つものではないし、実際に参加して体感しないと伝わらない。そうしたライブ性に音楽も描くことも乗っけていけるのではないかと思っています。頭の中に浮かぶアイデアをすぐにノートへアウトプットできる僕の強みもここで生きてくるかな、と。





FUSE: 活動の軸は、音楽にあるというわけではない？

henly:そこは、あまり決めてなくて。描くことによって音楽が作られると言えば、描くことがベースになるし、その逆もまた言えちゃうし、どっちでもいいかなって。本業を良く聞かれるのですが、忙しい方が本業だと思ってます。自分の中でやってみたいことは、即興感とか、ライブ感のうえでどちらもリンクさせていくということです。

FUSE:ライブ性を志向する根本にあるものはなんでしょう？

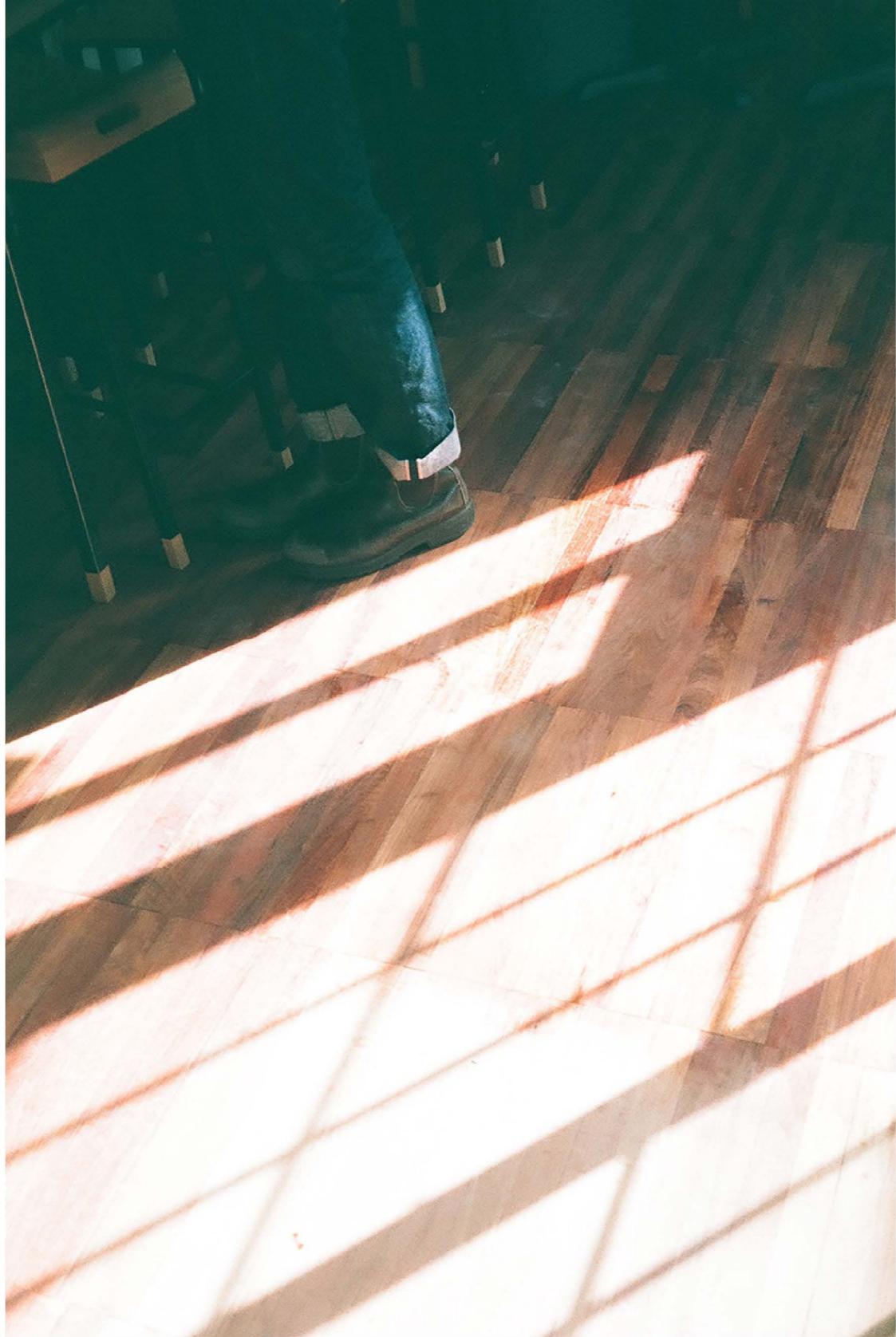
henly:なんでしょうね？ でも、自分にしかできないことをやりたいっていうことだと思えます。今、目の前にあるものでいかに作るかっていう。そこに自分にしかできないことを見出したいと思っているから、やり方が即興的な物事が増えていっているのかな。

FUSE:表現として挑戦したいことのほかに、ビジネス的な部分での展望は？

henly:ありますよ。EATBEATについてもCHALKBOYについても、来年は海外に進出するっていうのは掲げてて。EATBEATは、まず東京で認知度を作って、その後、地方に行って展開していくって東京からの注目を地方に集めたい。この流れを、国から出た海外でもできたら。

なぜ海外へ行きたいかっていうと、いまやっているライブ形式が日本のみで通用することなのか、海外で通用することなのかという部分を見極めたいところがあります。だからもうちょっと規模は大きく、活動の幅は広くやっていきたいな、と。

再来年あたりは、EATBEATとCHALKBOYのやっていることがかなり被ってくると思うので海外を回りつつ表現をブラッシュアップして呼吸するようにインプットとアウトプットをしていきたいです。



henlywork ヘンリーワーク

対象の深い本質まで感じ取る感受性とピアノや電子楽器等の即興的なパフォーマンスで心地よくその世界へ誘う。食材を食べる音、調理音からその場で音楽を創りだす料理と音楽が融合したイベント「EATBEAT!」やファッションブランドへの楽曲提供、黒板描き「CHALK BOY」など、多彩な顔を持つ音楽家。

www.henlywork.com

www.chalkboy.me



NEW PERSPECTIVES TO THE NEXT CULTURE

FUSE MAGAZINE

Editor in Chief

Shogo Otani

Editor

Eisaku Sakai

Art Director

Yu Miyazaki

Designer

Sachiyo Yamanaka

Photographer

Shigeta Kobayashi



See All "Perspectives"